

特集 支配者たらしむるもの

## フランス王権とニコポリスの敗戦

『嘆きと慰めの書簡』の分析から

竹中 徹

はじめに

13世紀末のアナトリア西北部に興隆したオスマン朝は、周囲へとその勢力を次第に拡大し、14世紀になるとビザンツ領内にも進出する。ムラト1世はエディルネを拠点にブルガリア・セルビアへと支配領域を拡げ、ビザンツ皇帝にもオスマンの属国となることを認めさせた。また1389年のコソヴォの戦いでセルビアを中心とするバルカン諸国の連合軍に勝利し、バルカン半島における優位を確立した。ムラトの後を継いだバヤズィト1世は、ブルガリアとセルビアを完全に臣従させ、ボスニアとワラキアさらにはアルバニアにも侵攻する。こうしてオスマンの勢力はドナウ河畔にまでおよび、いまやハンガリーがキリスト教世界の防衛線となった<sup>(1)</sup>。

こうした事態に対して危機感を強めたハンガリー王の働きかけにより、西ヨーロッパではようやく新たな十字軍が組織されることになる。この時期の教皇はシスマによって2人存在していたが、ローマのボニファティウス9世とアヴィニョンのベネディクトゥス13世は、各々同様に異教徒に対する戦いを宣言した。こうしてハンガリー王ジギスムントのもとに、フランスやイングランドなどヨーロッパ各地から騎士が集結し、オスマン軍に対する十字軍が組織された。そして1396年9月末に、両軍はドナウ河畔のニコポリスにおいて衝突する<sup>(2)</sup>。

この戦いはオスマン軍の圧勝に終わり、十字軍に参加した多くのフランス貴族や騎士が戦死するか捕虜となる。捕虜たちの中にはブルゴーニュ侯フィリップの息子ヌヴェル伯ジャンも含まれていた。このニコポリスにおける敗戦は、当時のフランス王権においてどのように受け止

(1) オスマン朝のバルカン半島での勢力拡大については以下を参照。新井政美『オスマン vs. ヨーロッパ——トルコの脅威』とは何だったのか』講談社選書メチエ 237、2002年、59-84頁；Inalcik, H., 'The Ottoman Turks and the Crusades, 1329-1451,' in H. W. Hazard and N. P. Zacour (eds.), *The Impact of the Crusades on Europe*, Wisconsin, 1989, pp. 222-275.

(2) ニコポリス十字軍の経緯については、註1に挙げた参考文献のほかに以下を参照。八塚春児『十字軍という聖戦——キリスト教世界の解放のための戦い』NHKブックス 1105、2008年、236-237頁；Autrand, Fr., *Charles VI. La folie du roi*, Paris, 1986, pp. 327-345.

められたのであろうか。また、オスマン軍の侵攻というキリスト教世界の危機に直面して、フランス王はどのような立場でどう行動すべきだと考えられたのだろうか。

14世紀初めから15世紀にかけて、フランス王権の周辺には多くの知識人が集まり、彼らによって政治的著作が盛んに作成された。これらの著作において扱われたテーマの1つが、フランス王国外の世俗権力や霊的権力との対外関係である。このことに関して従来の説明では、皇帝権力と教皇権力という2つの普遍的権力から、フランス王権が自立しようとする主張に焦点が当てられ、「近世国家」としての王国形成という観点から研究がなされてきた。しかしながらその一方で、キリスト教諸国をまとめる「普遍的キリスト教世界」の理念は、この時期においても、フランスの知識人たちの著述に強い影響を与え続けている。さらに言えば、当時のフランス王権の周辺において、フランス王をキリスト教世界の指導者として位置づけようとする議論が存在していたのである。

たとえば、シスマの直前にシャルル5世のもとで作成された政治的著作、『果樹園の夢』《*Songe du Vergier*》<sup>(4)</sup>は、教皇庁がアヴィニョン、すなわちフランスに滞在しているという状況を利用し、神に選ばれた存在であり唯一の教会の擁護者であるフランス王と、教皇の密接な関係を示す議論を構築する。その議論からは、フランス王をキリスト教世界全体の世俗における指導者として、位置づけようとする意図を見いだすことができる。<sup>(5)</sup>

またフィリップ・ド・メジエールは、1389年に執筆した『老いたる巡礼者の夢』《*Songe du Vieil Pèlerin*》<sup>(6)</sup>において、2人の教皇が並び立ちカトリック世界が両陣営に分裂して争う状況を解決し、聖地の奪還を実現するための方法について論じている。その議論において彼は、フランス王シャルル6世の主導によってキリスト教世界における改革と平和が実現されることを期待する。そして、神に選ばれた存在であり教会の擁護者であるフランス王が、積極的に他の君主諸侯と友好関係を結び、公会議に相当する全体会議を開催することを提案する。

オノレ・ボヴェもまた、1394年頃に執筆した『シスマの問題についての夢』《*Somnium super materia scismatis*》<sup>(7)</sup>において、シスマ解決の主導的役割をフランス王シャルル6世に期待している。

(3) ここでは概説書の例として以下を挙げておく。Guenée, B., *L'Occident aux XIV<sup>e</sup> et XV<sup>e</sup> siècles : Les États*, 6<sup>e</sup> éd., Paris, 1998 [1971], pp. 63-77; Rigaudière, A., *Pouvoirs et institutions dans la France médiévale, t.2 : Des temps féodaux aux temps de l'État*, 2<sup>e</sup> éd., Paris, 1998 [1994], pp. 91-106. また、「王はその王国における皇帝である」という定式や、「最もキリスト教的な王」という尊称について、Krynen, J., *L'empire du roi. Idées et croyances politiques en France XIII<sup>e</sup>-XV<sup>e</sup> siècle*, Paris, 1993, pp. 345-414; 渡辺節夫『フランスの中世社会——王と貴族たちの軌跡』吉川弘文館、2006年、182-197頁が論じている。一方、フランス王権と教会の関係については、教皇側が主張するテオクラシー的議論に対し、王権のもとで形成されるガリカニスムの議論に注目した考察がなされる。M・パコー（坂口昂吉・鷲見誠一訳）『テオクラシー』、創文社、1985年；Martin, V., *Les origines du Gallicanisme*, tome 1 et 2, Paris, 1939; A-G・マルティモール（朝倉剛・羽賀賢二訳）『ガリカニスム』、白水社、1987年；野口洋二「中世のキリスト教」『世界歴史大系 フランス史1』（柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編）、山川出版社、1995年、460-469頁。

(4) Schnerb-Lièvre, M. (éd.), *Le Songe du Vergier*, tome 1 et 2, Paris, 1982.

(5) 拙稿「シャルル五世期フランス王権の『夢』——王と教皇、キリスト教世界」『西洋史学』第197号、2000年、45-62頁。

(6) Philippe de Mézières, *Le Songe du Vieil Pèlerin of Philippe de Mézières, Chancellor of Cyprus*, Coopland, G. W. (ed.), 2 vols., Cambridge, 1969.

(7) Honoré Bovet, *L'Apparicion maistre Jehan de Meun et le Somnium super materia scismatis*, Arnold, I. (éd.), Paris, 1926.

疲弊したキリスト教世界を救うため、両陣営の歩み寄りが必要であるとボヴェは論じる。そして、アヴィニョン教皇クレメンス7世が亡くなった今、公会議の開催により問題を解決することが最も時宜を得た方策であり、フランス王が教皇や聖職者、他の世俗君主たちに働きかけることで、平和的な和解の道が開かれるとしている<sup>(8)</sup>。

このように、当時のフランス王権の周辺において活躍した著述家たちは、それぞれの執筆時の政治状況を内容に反映させつつ、フランス王をキリスト教世界の指導者として位置づける議論を展開した。そしてこれらの議論において、異教徒の脅威に対してキリスト教世界を防衛することは、キリスト教世界の指導者の義務と考えられた。したがってオスマン軍の侵攻に対しても、カトリック信仰の擁護者として先頭に立って戦うことをフランス王は期待されたのである。ニコポリスでの敗戦をめぐる議論においても、そのような態度をうかがうことができる。本稿ではこうした議論の1つを取り上げて考察し、この時期のフランス王権に関する議論の特徴を明らかにしたい。

## 1 フランス王権の対外政策とその動揺

まず、当時の議論に影響を与えたであろう、フランス王権内外の政治状況について述べておこう。

1392年8月、シャルル6世は最初の狂気の発作を起こした。この狂気の病は以後たびたび発症し、亡くなるまでの30年間にわたり、小康状態と精神の不安定な状態を繰り返すことになる。これによりシャルルは継続的に自ら統治を行うことが困難になった<sup>(9)</sup>。それまで王の親政を支えてきたマルムーゼ派の国王顧問官たちは更迭され、遠ざけられていた叔父たちが王政府の中枢に復帰することになる。彼らの中でも特に王権の政策決定に影響力を持っていたのが、ブルゴーニュ侯フィリップであった。したがって、王権の立場を強化しようとする当時の著述家たちは、王個人の健康状態に左右されない議論を展開する必要がある<sup>(10)</sup>。合わせて、実際に政権を担った王族の諸侯たちの立場について論じ、彼らの政策に配慮することも重要であった。

Fr・オトランは、この時期フランス王権において重要とされた対外政策として、①シスマの解決、②イングランドとの和平、③トルコ人たち（オスマン）に対するキリスト教世界の防衛を挙げている<sup>(11)</sup>。

まずシスマへの対処についてだが、1378年のシスマ発生以来、フランス王権はアヴィニョン教皇庁側を支持し続けてきた。しかしシャルル6世の発病とマルムーゼ派の更迭を機に王権

---

(8) 武力による解決法である「事実の道」をボヴェは否定し、当時パリ大学において議論されていた「譲位の道」「合意の道」「公会議の道」のそれぞれについて成功の可能性を論じている。

(9) Guenée, B., *La folie de Charles VI. Roi Bien-Aimé*, Paris, 2004, pp. 149-150.

(10) シャルル6世の親政とマルムーゼ派については、Autrand, *Charles VI*, pp. 189-268 を参照。

(11) Autrand, *Charles VI*, pp. 329-345.

は政策を転換し、アヴィニオン教皇側への支持を放棄し平和裏に教会の統一を実現することを考えるようになる。1395年、96年および98年にパリにおいて召集された王国聖職者会議も、教皇に対する服従拒否の決議によって王権の政策を後押しした。<sup>(12)</sup>

このようなシスマ解決に向けての努力において重要な課題であったのが、ローマ側を支持していたイングランドとの和解であった。1389年に3年間の休戦が成立し、その後この休戦が1392年、93年、94年に更新されると、両者間の永続的な平和の成立を期待する動きがそれぞれの宮廷において高まってくる。そして1396年にフランス王シャルル6世の娘イザベルと、イングランド王リチャード2世の婚姻が実現することとなる。それとともに休戦を28年間延長するという条約が成立し、最終的な和平にまでは至らないものの、フランスとイングランドの関係は比較的良好な状態に向かいつつあった。<sup>(13)</sup>

以上に述べたような、カトリック世界の再統一や英仏間の平和の成立を期待する動きの背景の1つには、オスマン軍への対処の問題もあったと思われる。異教徒に対するキリスト教世界の防衛のためには、キリスト教徒全体が一体となって戦うことが必要であると、オスマンの侵攻は当時の人々に強く認識させた。また同時に、異教徒に対する戦いや聖地奪還という目標は、英仏間の対立を乗り越えるための有効な手段にもなりえた。1392年から1396年にかけての休戦交渉においても、オスマンに対する十字軍の派遣が話し合われ、その結果として1396年のニコポリス十字軍の遠征がなされることになる。<sup>(14)</sup>

互いに関連するこれら3つの政策を王権内において主導したのが、政権に復帰したブルゴーニュ侯フィリップである。1396年の休戦条約と十字軍の派遣によって象徴されるように、この構想は成功するかと思われた。

しかしその一方で、これらの対外政策を揺るがしかねない不安要素も存在していた。フランス王権における主導権をめぐる、ブルゴーニュ侯とオルレアン侯の対立である。<sup>(15)</sup>シャルル6世の弟であるオルレアン侯ルイは、1388年の親政開始において王を支えて次第に王権内における発言権を増していった。そしてルイは、一貫してアヴィニオン教皇を支持しており、このことによってブルゴーニュ侯の政策と対立することになる。<sup>(16)</sup>

ニコポリス十字軍の派遣においても、両諸侯の対立をうかがうことができる。当初の計画においてハンガリーに向かう軍勢は、ブルゴーニュ侯フィリップ、ランカスター侯ジョン、オルレアン侯ルイによって率いられるはずだった。しかし、ブルゴーニュ侯の主導する政策に不満

(12) Guenée, *La folie de Charles VI*, pp. 180-182; Autrand, *Charles VI*, pp. 337-338, 343-345; Millet, H., *L'Église du Grand Schisme 1378-1417*, Paris, 2009, pp. 30-46; 野口洋二、前掲論文、466-467頁; M. D. ノウルズ他 (上智大学中世思想史研究所編訳) 『キリスト教史4 中世キリスト教の発展』平凡社ライブラリー、1996年、462-463頁。

(13) フランスとイングランドの平和に向けての動きについては、Autrand, *Charles VI*, pp. 333-342; 城戸毅 『百年戦争——中世末期の英仏関係』刀水書房、2010年、79-84頁; 朝治啓三、渡辺節夫、加藤玄編著 『中世英仏関係史 1066-1500——ノルマン征服から百年戦争終結まで』創元社、2012年、124-125頁を参照。

(14) Autrand, *Charles VI*, pp. 331-332, 342.

(15) この時期のフランス王権内における政策をめぐる、王族である白ユリ諸侯たちの対立については、佐藤猛 『百年戦争期フランス国政史研究——王権・諸侯国・高等法院』北海道大学出版会、2012年、171-225頁を参照。

(16) Autrand, *Charles VI*, pp. 337-338, 343-344; 佐藤猛、前掲書、192-193頁。

を持つオルレアン侯は、十字軍の準備を放棄してしまう。最終的に派遣された十字軍は、ブルゴーニュの軍勢を中心に構成され、ブルゴーニュ侯の息子ヌヴェル伯ジャンによって率いられることになる。最初に述べたように、このニコポリス十字軍はオスマン軍に大敗を喫し、多くのフランスの貴族や騎士が、戦死するか捕虜としてバヤズィト1世の前に引き立てられた。この捕虜たちの身代金をいかにして用意するかという問題が、フランス王権に重い負担となつてのしかかり、ブルゴーニュ侯の主導する対外政策を揺るがすこと<sup>(17)</sup>になる。

以上に述べてきたような政治状況が、この時期のフランス王の立場についての議論にも、大きな影響を与えている。このことはニコポリスの敗戦についての議論を考察する上でも注意を払う必要がある。

## 2 先行研究と『嘆きと慰めの書簡』

ニコポリスの戦いを扱った研究としては、その準備段階から敗戦の結果に至るまでの経緯について考察したものを別にすれば、フランス王国に関連するものは、十字軍の参加者について、特にブルゴーニュの貴族や騎士たちについての考察がその多くを占めて<sup>(18)</sup>いる。本稿のテーマに関わる、ニコポリスの敗戦がどのように受容されたかということについての考察は、それほど多くないのが現状である。

そうした考察の中で注目しておきたいのが1996年のÉ・ゴシェによる研究<sup>(19)</sup>である。ゴシェは『サン・ドニ修道士の年代記』と、当時フランス元帥 (maréchal) であったジャン・ル・マングル、通称ブシコーの『事績の書』を史料として分析し、それぞれにおける敗戦の記述の仕方を比較考察している。そしてどちらの史料においても、単なる事実関係の記述で満足せず、非難や賞賛の記述とともに何らかの教訓を示そうとする姿勢が見られることを指摘する。どういった教訓に著者が重点を置くかにより記述の仕方が変化し、その「真実」を曇らせる事柄は

(17) ニコポリス十字軍の派遣とその敗戦、それに関連してのブルゴーニュ侯とオルレアン侯の対立については、Autrand, *Charles VI*, pp. 342-343 を参照。

(18) ニコポリスの戦いの経緯について扱った研究著作としては、Atiya, A. S., *The Crusade of Nicopolis*, [1934], repr., New York, 1978 がある。事実関係など細かい部分についての批判はあるものの、現在においてもこの主題に関する第一の著作となっている。またフランスやブルゴーニュからの参加に関しては、雑誌 *Annales de Bourgogne* の1996年68巻3号の特集 *Actes du colloque international « Nicopolis, 1396-1996 » Dijon, 1996* における論文を挙げることができる。なかでもニコポリス十字軍の派遣におけるブルゴーニュ侯の意図について考察した Magee, J., 'Le temps de la croisade bourguignonne : l'expédition de Nicopolis,' pp. 49-58; 十字軍参加者の構成について扱った Schnerb, B., 'Le contingent franco-bourguignon à la croisade de Nicopolis,' pp. 59-75; 捕虜たちのその後の処遇について論じた Richard, J., 'Les prisonniers de Nicopolis,' pp. 75-83; 著名な参加者ブシコーについての記述を中心に考察した Housley, N., 'Le Maréchal Boucicaut à Nicopolis,' pp. 85-99 がある。Paviot, J., 'Boucicaut et la croisade (fin XVI<sup>e</sup> - début XV<sup>e</sup> siècle),' dans *La noblesse et la croisade à la fin du Moyen Âge (France, Bourgogne, Bohême)*, Nejedlý, M. et Svátek, J. (éds.), Toulouse, 2009, pp. 69-83 もまた、ブシコーの活動とその根底にある騎士としての思想について考察している。

(19) Gaucher, É., 'Deux regards sur une défaite : Nicopolis (d'après la *Chronique du Religieux de Saint-Denis* et le *Livre des faits de Boucicaut*),' *Cahiers de recherches médiévales et humanistes*, 1 (1996), pp. 93-104.

記述から排除されることになる。『年代記』では王への君主鑑として、十字軍に参加したフランス人たちの規律の乱れが痛烈に非難されており、敗戦はキリスト教徒の悪徳に対する罰であり、トルコ人はそのために神によって送られたものと位置づけられている。一方『事績の書』は騎士たちに対する模範としての性格を帯びており、ブシコーをはじめとするフランス人騎士たちの勇戦が賞賛され、敗戦の原因はハンガリー人たちの裏切りに帰せられている。

ゴシェの考察においても現れているように、ニコポリスでの敗戦についての当時の著述家たちの見解は、十字軍に参加した者たちの傲りや無規律を原因として挙げるものと、ハンガリー軍の逃走による裏切りを非難するものの2つに大別することができる。<sup>(20)</sup>このどちらがより強調されるかは、著作の目的によって左右されることになる。

このほか、中世末期の十字軍の思想についてJ・パヴィオが、十字軍の正当化の根拠となる議論を中心に考察している。<sup>(21)</sup>またオトランは、先に述べたフランス王権の3つの対外政策の思想的弱点として、イングランドとの関係における根本的な争点であるフランス王の「主権」(souveraineté) についての問題に目をつぶり、キリスト教世界のための戦いを目標に掲げることとで平和を達成しようとしたことを指摘している。<sup>(22)</sup>

しかしながら、当時の著述家たちがニコポリスでの敗戦という最大の危機の報を受けて、キリスト教世界においてフランス王権が何をなすべきと考えたのか、という点について明らかにする考察はこれまで存在しない。そこで本稿では、フィリップ・ド・メジエールの著作『嘆きと慰めの書簡』《*Épître lamentable et consolatoire*》<sup>(23)</sup>における議論の分析を通じて、当時のフランス王権周辺において存在した考えを明らかにしたい。

著者のフィリップ・ド・メジエール(1327-1405年)は、若いころキプロス王ピエール・ド・リュジニャンのもとで書記官長として仕えて外交面において活躍し、新たな十字軍の実現を求めて西方諸国を遊説して回った人物である。<sup>(24)</sup>この聖地奪還という目標は、その後の彼の著述活動において重要な位置を占めている。<sup>(25)</sup>また、この時に得た東西諸国についての知識と経験も、彼の議論の中に反映され大きな特徴となっている。その後メジエールはフランスに戻って

(20) Cristea, O. C., 'La Défaite dans la pensée médiévale occidentale. Le cas de la croisade de Nicopolis (1396),' in *New Europe College Yearbook 1999-2000*, Bucharest, 2003, pp. 39-69.

(21) Paviot, J., 'L'idée de croisade à la fin du Moyen Âge,' dans *Les Projets de croisade. Géostratégie et diplomatie européenne du XIV<sup>e</sup> au XVII<sup>e</sup> siècle*, Paviot, J. (éd.), Toulouse, 2014, pp. 17-29.

(22) Autrand, Fr., 'La paix impossible : les négociations franco-anglaises à la fin du 14<sup>e</sup> siècle,' *Annales de Bourgogne*, t.68, 1996, pp. 11-22.

(23) 本稿では Philippe de Mézières, *Une Épître lamentable et consolatoire. Adressée en 1397 à Philippe le Hardi, duc de Bourgogne, sur la défaite de Nicopolis (1396)*, Contamine, Ph. et Paviot, J. (éds.), Paris, 2008 を史料として使用する(以下 *Épître lamentable* と表記)。

(24) 彼の経歴については、Jorga, N., *Philippe de Mézières, 1327-1405, et la croisade au XIV<sup>e</sup> siècle*, [Paris, 1896], repr., Genève, 1976; Autrand, Fr., *Charles V. Le Sage*, Paris, 1994, pp. 695-698; id., *Charles VI*, pp. 25-29, 198-202 を参照。

(25) 彼の十字軍の構構については、Williamson, J., 'Philippe de Mézières and the Idea of Crusade,' in *The military orders : Fighting for the Faith and Caring for the Sick*, Barber, M. (ed.), Hampshire, 1994, pp. 358-364; Radkóvská, M., 'Le Songe du Vieil Pelerin : l'idée de croisade rêvée et vécue chez Philippe de Mézières,' dans *La noblesse et la croisade à la fin du Moyen Âge*, 2009, pp. 31-42 など を参照。

シャルル5世の顧問官となり、後のシャルル6世である王太子の教育係に抜擢される。シャルル5世の死後パリのケレスティヌス会修道院に隠居するが、シャルル6世とは親密な関係を保ち続けており、フランス王権内に強い影響力を持っていた。たとえばシャルル6世の親政の開始にあたって、教育の書として『老いたる巡礼者の夢』を執筆し王に捧げたのが有名である。<sup>(26)</sup>その他にもイングランドとの和平に関連して、フランス王の依頼により1395年に『リチャード王への書簡』を執筆し、リチャード2世に対しイザベルとの婚姻を勧め<sup>(27)</sup>ている。

『嘆きと慰めの書簡』は、ニコポリスでの敗戦の知らせを受けて1397年初頭に執筆されたものであり、ブルゴーニュ侯フィリップに宛てた書簡の形式をとっている。書簡と言っても幻視やアレゴリーの使用、聖書の引用、歴史記述などによって複雑な議論を作り上げている。その内容は、敗戦で息子や近親者、仲間や臣下を失い大きな痛手を受けたブルゴーニュ侯を慰め、その痛手を癒す方法を提示するというものである。メジエールの基本的な考え方は、『老いたる巡礼者の夢』のころから一貫しており、キリスト教世界が一体となって、とくにフランス王シャルル6世とイングランド王リチャード2世の協力によって、信仰の敵と戦うというものである。これは先に述べたブルゴーニュ侯の主導する政策と、基本的な方向性としてはほぼ一致するものである。しかしそれを実現するために示される具体的な方法は、メジエール独自の議論となっている。

また、メジエール自身はフランス王の権威の称揚者であったが、かつての経歴などからマルムーゼ派やオルレアン侯ルイと近い人間関係にあり、ブルゴーニュ侯との微妙な関係が記述内容にも反映されている。オスマンとの戦いにおける王の立場を、王の親族諸侯に対して示したものであるという点も、この著作を興味深いものにしている。したがってこの著作の記述内容を分析することにより、キリスト教世界におけるフランス王の位置づけのみならず、王家と血縁関係を持つ「白ユリ諸侯」についての考えも読み取ることができる。

ところが、この著作の記述内容に関する研究としては、Ph・コンタミヌによる考察があるが、あらすじをまとめた資料紹介と言っているものである。<sup>(29)</sup>この著作に関して言及した論文はいくつか存在するが、メジエールの議論の一部を取り上げたものに過ぎず、この著作全体の議論について本格的に分析した研究はほぼ無いと言ってよい。そこで本稿では、当時のフランス王権や十字軍に関するその他の研究考察により補足しつつ、考察を進めていくことにする。

---

(26) Autrand, *Charles VI*, pp. 198-202.

(27) Marchandisse, A., 'Philippe de Mézières et son *Épître au roi Richart*,' *Le Moyen Âge*, CXVI, 2010/3-4, pp. 605-623; Curry, A., 'War or Peace? Philippe de Mézières, Richard II and Anglo-French Diplomacy,' in *Philippe de Mézières and His Age. Piety and Politics in the Fourteenth Century*, Blumenfeld-Kosinski, R. and Petkov, K. (eds.), Leiden, Boston, 2012, pp. 295-320.

(28) オルレアン侯ルイとの関係については、Autrand, *Charles VI*, pp. 380-383.

(29) Contamine, Ph., 'La *Consolation de la desconfiture de Hongrie* de Philippe de Mézières (1396),' *Annales de Bourgogne*, t.68, 1996, pp. 35-47.

### 3 ニコポリスでの敗戦の原因について

メジエールはまず、敗戦の痛手を癒すためにはその原因を知る必要があると述べる。そして人体における四体液論に基づいて、敗戦についての普遍的議論を展開する。<sup>(30)</sup> 人体において病が4つの体液のバランスが損なわれることによって生じるように、敗戦による痛手は軍隊において4つの徳が墮落することによって引き起こされるとメジエールは考える。この徳とは魂の救済に必要な徳のことではなく、軍隊が真の栄光と勝利を得るために必要な倫理徳（徳目）のことである。すなわち規範（*règle*）、騎士団の規律（*discipline de chevalerie*）、従順（*obédience*）、正義（*justice*）であり、これらについて彼は次のように説明する。<sup>(31)</sup>

「規範」とは軍隊を統制するものであり、飲食・睡眠・見張り・支出・節度ある備蓄・給与・会議など、軍隊の運営におけるすべての事柄に関わるものである。こうした規範は軍隊のみならず、すべての政治・顕職・労働において必要なものである。「騎士団の規律」とは軍事に関わる術策のことであり、それら無しでは軍隊の騎士たちは無秩序になり、君主は敗北の危機に瀕することになる。メジエールはこれに関して、ウェゲティウスの著作などを読むか皆の前で読み上げさせることをすすめている。<sup>(32)</sup> 「従順」については、ルシフェルに対する戦いにおいて、イエスが父なる神に従い十字架において亡くなった姿が例として挙げられる。そして、アダムの不服従による楽園追放以来、イスラエルの最初の王サウルなど、多くの戦いにおいて不服従が敗北の原因となったことをメジエールは述べ、君主の軍隊においてこの倫理徳が必要であるとする。そして「正義」は、上に述べた3つの倫理徳の実践において必要なものである。軍隊では不節制を正し、規範を損なう者や騎士団の規律に従わない者を厳しく処罰するためにとくに必要である。

軍隊において必要なこれら4つの倫理徳の1つでも損なわれることがあれば、その軍隊の真の守護者にして最高指揮官であるイエス・キリストによって見放されることになる。その結果として、ルシフェルによって代理として送り込まれた「傲慢」とその2人の妻「貪欲」と「色欲」、彼らの従者である悪徳たちによってとらわれることとなり、そのような軍隊はたやすく敵によって撃破されることになる。以上のようにメジエールは、軍隊における墮落と悪徳によって敗北はもたらされるものであると考えている。それでは、ニコポリス十字軍における墮落とは具体的には何であったのか。

ハンガリー王のもとでのカトリック教徒の無秩序さについては、メジエールはあいまいな書き方をしている。彼はこの戦いの様子について、内容が一様ではない伝聞のみに基づいて記述

---

(30) *Épistre lamentable*, pp. 105-108.

(31) *Épistre lamentable*, pp. 128-133.

(32) ウェゲティウスは4世紀ごろの軍事学者で、著書に『軍事論 *De Re Militari*』がある。このほか、アエギディウス・ロマヌスの『君主の統治について *De Regimine Principum*』と、別の詳細不明の著作がここでは挙げられている。



するしかないので、各々の民族や個人人の行為についてはあえて書くことはしないと述べる<sup>(33)</sup>。しかし1396年の12月初めに敗戦の第一報がフランスにもたらされて以降、メジエールのもとには彼の構想の支持者たちのネットワークによって、より多くの情報が集まったことだろう。さらに同年のクリスマス・イブには、捕虜の身代金請求を伝える使者として解放されたジャック・ド・エイイがパリの王宮に到着し、彼によって敗戦の詳細が伝えられた<sup>(34)</sup>。にもかかわらず、メジエールがこのような書き方をしたのは、ブルゴーニュ侯に配慮したのだと思われる。侯の息子ジャンがフランスからの十字軍の指揮官であり、参加した騎士たちもブルゴーニュ出身者が多かったことから、侯に宛てた書簡で彼らを非難することは憚られたのだろう。

その代わりに東方諸国の正教徒について、メジエールは独自の議論を展開する<sup>(35)</sup>。以下の引用が示すように、ハンガリー王が率いた軍の欠点として混成軍であったことを挙げている。

[嘆きの日に居合わせた者たちの] 報告によるとハンガリー王の戦士たちは、4つか5つのカトリックのキリスト教徒の民族と、4つか5つの離教した (schismatiques) キリスト教徒の民族からなっていた。すなわちカトリック教徒は、ハンガリー人、フランス人、ドイツ人、イングランド人、そしていくらかのイタリア人である。離教者はボスニア、セルビア、ワラキア、ラス、ブルガリアの者たちで、2～300年来、彼らはローマ教会もカトリック・キリスト教徒のラテン人たちも決して愛することはなかった。(中略) 敗北に際してこれらの離教者たちが、存在していなかった方がおそらく適当であった。それというのも、おそらくカトリック教徒たちは、人が彼らについて話したことよりも良く統制されていたと思われるからである<sup>(36)</sup>。(引用文中の [ ] は筆者による補足、以下同様)<sup>(37)</sup>

メジエールは、離教者つまり正教徒の存在がハンガリー王のもとに終結した十字軍全体の秩序を乱したと考えており、彼ら離教者たちのことを他のりんごを損なう腐ったりんごに例えている。そして彼の個人的見解として、これらの離教者たちは暴君バヤズィトの支配に長年従属しており、ラテン人たちに対する憎悪のために、おそらくハンガリー王よりもトルコ人に従うことの方を好んだと述べている<sup>(38)</sup>。このようにしてハンガリー王の率いる軍隊において4つの倫理徳が損なわれ、それに代わって悪徳が軍を支配した。このことによって軍の守護者にして

(33) *Épître lamentable*, pp. 120-121.

(34) Atiya, *op. cit.*, pp. 100-101.

(35) Petkov, K., 'The rotten apple and the good apple : Orthodox, Catholics, and Turks in Philippe de Mézières' crusading propaganda,' *Journal of Medieval History*, v. 23, no.3, 1997, pp. 255-270; Cristea, *op. cit.*, pp. 52-53.

(36) ラシュカ (Rascie)。中世セルビアの中心部に位置していた。ラスはその中心都市。

(37) *Épître lamentable*, pp. 119-120.

(38) 正教徒に対する否定的見解は、メジエールが以前に執筆した『老いたる巡礼者の夢』においても見ることができる。ギリシャ人はシスマ的な教義を改めず、傲慢・貧困・頑迷によって支配されており、バルカン半島の他の諸国でも同じ状況である。メジエールはこのように述べ、将来の十字軍においてトルコ人を追い払い、これらのバルカン半島の諸国をカトリック信仰に立ち戻らせるべきだとする。 *Le Songe du Vieil Pelerin*, vol. 1, pp. 233-235, vol. 2, p. 434.

最高指揮官であるイエス・キリストは憤慨し、強く恐るべき暴君であるバヤズィトの剣と彼の無慈悲な騎士たちによって、この十字軍が敗北することを許したのである。メジエールはニコポリスでの敗戦の原因について、以上のように結論付けている。

こうしたメジエールの議論は、先に述べた当時の著述家たちにおける2種類の見解を、両方取り込んだ独特なものとなっている。直接的な原因として十字軍内の規律の乱れを非難しつつ、その一方で離教者による裏切りの要素も付け加えている。この軍の規律の乱れも離教者たちの影響によるものであり、敗戦の根本的な原因として離教者たちの存在をメジエールは非難している。彼にとって真の信仰とはカトリックの教義にほかならず、異教徒に対する戦いはカトリック教徒の十字軍によって行われるべきであるという考えをここに見て取ることができる。

#### 4 フィリップ・ド・メジエールの提案

##### (1) 「イエス・キリストの受難騎士団」

敗戦の痛手を癒すための救済策としてメジエールによって提案されるのが、新たな騎士団を結成することである。彼はまず、信仰の敵に対する軍隊はいかなる者たちによって構成されるべきかというところから議論を始める。

敗北の普遍的な原因についての議論によって導かれる結論として、先に述べた4つの倫理徳をしっかりと理解し受け入れることができる統制された新たな人々、すなわち「新たなイスラエルの民」を見つけ出す必要があるとメジエールは述べる。そしてカトリック・キリスト教世界の戦士を3つの層に区分し、それぞれについて構成員として相応しいかどうかを論じる<sup>(39)</sup>。第1層は歩兵の人々、第2層は騎士、バロン、エキュイエ、ブルジョワ、商人などの中間層、第3層は王と大諸侯というように区分がなされ、単なる職業的戦士だけではなく、カトリック信仰を守る戦士として俗人全体について彼は論じている。

このうち第1層の者たちは、構成員として相応しくないとされる。歩兵、つまり民衆の兵士たちは、大部分が本質的に粗野で徳についてあまり教育されておらず、しばしば自分たちのしかるべき領主に対し反抗的である。一見よく統制されているようであったとしても、4つの倫理徳に完全に従うことが彼らの中に浸透していないので、メジエールは彼らを構成員として不適格であるとする。この記述の背景には、特にフランドルにおける都市の反乱が念頭にあったと思われる。フランドル伯とフランス王権に対し1379年にヘントを中心に勃発したこの反乱は、英仏の対立とも関連しつつ1385年まで続き記憶に新しく、ブルゴーニュ侯フィリップも、フランドル伯として当事者であったからである<sup>(40)</sup>。

第3層の者たちもまた、別の理由によって相応しくないとされる。王や諸侯たちは過度に贅沢な生活の中で生まれ育ち、傲りや嫉妬や虚栄が彼らの間に広まっている。根気や金銭の欠如、

---

(39) *Épître lamentable*, pp. 135-144.

(40) このフランドルでの反乱については、『中世英仏関係史 1066-1500』、209-211頁を参照。

妻子や自分の王国への物質的愛情により、彼らは敵地に長くとどまることができない。また彼らの周囲には追従者たちが存在し悪しき助言を行う。これらのことにより、軍隊において王や諸侯たちが4つの倫理徳によって統制され続けることは少ない。メジエールはこのように論じて、新たな軍隊の構成員としては不適切であるとする。ただしその一方で、4つの倫理徳を理解している賢明で勇敢な王や諸侯が存在することも否定しておらず、新たなイスラエルの民の指揮官を彼らの中に見いだすことが可能であるとも述べている。

以上のことからメジエールは、第2層の者たちによって新たな騎士団が構成されるべきだとする。彼らは大きな領地を持たないので、自惚れ・貪欲・傲慢にとられることがなく、歩兵たちのような傾向も持たない。したがって、神への奉仕以外のことにとられることなく、良く統制されるだろうから構成員として相応しいと彼は論じている。

4つの倫理徳によって統制されるこの新たな騎士団について、メジエールは次のように述べている。彼らは自身の出費により参加し、1つの共通の財布により生活し、騎士団の領地や収入そして顕職はすべて共同で管理される。そして使徒行伝における使徒と弟子たちの生活のように、信仰への大いなる愛による共同生活を行い、模範を示すことでキリスト教世界を改革し回復させる。彼はこのように説明し、この騎士団を「イエス・キリストの受難騎士団」(la chevalerie de la Passion de Jésus-Christ)と呼んでいる。またこの騎士団は、カトリック・キリスト教世界のすべての言語・王国・地域から召集されるべきだとする。そしてこの騎士団の目的として、シスマによって分裂したカトリック世界を、賞賛に値する信仰の行いによって統一することと、信仰の敵と実際に戦うことを掲げる。<sup>(41)</sup>

もしカトリック教会が分裂して傷ついていたなら、敗戦によって痛手をこうむることはなかったとメジエールは考えている。<sup>(43)</sup>それゆえに、カトリック世界が一致団結して新たな騎士団を設立し、共通目的のもと1つの集団として行動することを求めるのである。このことは十字軍を実施する際の経路についての議論にも表れている。彼は騎士団を3つの集団に区分して3つの経路で遠征を行うことを提案する。これはバルカン方面のオスマン軍とイベリア方面のサラセン人、2つの敵と同時に戦うというものである。<sup>(44)</sup>しかしこれら3つの集団は、名前・習慣・規則・運営において1つであり、三位一体のように実体において1つであるとされる。<sup>(45)</sup>このようにメジエールは、ある特定の王や諸侯の意向を反映した軍隊が、独自の方針とともに別々に十字軍に参加することを否定している。

聖地回復のために新たな騎士団を創設するというメジエールの計画は、彼がキプロス王に仕えていたころから抱いていた構想で、先に述べた1395年のリチャード2世への書簡の中でも、この騎士団への協力の要請がなされている。また彼を支持する者たちによってこの構想を広め

---

(41) *Épître lamentable*, pp. 145-146.

(42) *Épître lamentable*, p. 156.

(43) *Épître lamentable*, p. 122.

(44) *Épître lamentable*, pp. 186-192. バルカン方面へは陸路と海路を予定している。

(45) *Épître lamentable*, pp. 186, 201.

る活動がなされ、その範囲はフランス王国内にとどまらず周辺諸国にも広がっていた。<sup>(46)</sup>

## (2) フランス王の立場

こうした救済策において、フランス王はどのような立場にあると考えられているだろうか。

メジエールは議論のはじめに、今回の敗北により痛手を被ったのは、身内を失ったブルゴーニュ侯やハンガリー王だけではないとする。神への愛と隣人への愛により、著しく傷つけられた神の信仰と兄弟たるキリスト教徒の損害と喪失のために、この痛手はキリスト教世界のすべての王たちや諸侯たちに共通のものであると論じる。そしてキリスト教世界において特別の地位にあるがゆえに、なかでもフランス王にとって特に痛手であったと彼は述べる。<sup>(47)</sup>

イエス・キリストの信仰に関して、カトリックの王たちの中でも特別の恩恵と神の塗油によって、神の教会によりフランス王は最もキリスト教的な王と呼ばれる。優しきイエスの栄光に関して、何度も繰り返して述べるあの敗北により、信仰は過去 100 年間において最も傷ついた。[実際に敗北した] ハンガリー王をのぞくキリスト教世界のすべての王よりも、フランス王は傷つけられたと心に感じないならば、最もキリスト教的な王とは言えないだろう。

このような議論によって、フランス王は教会とキリスト教世界の最高の守護者として位置づけられ、いとも勇敢なる聖王ルイの子孫として、この敗北による信仰とキリスト教世界にとっての恥辱をそそぐべきであるとされる。<sup>(48)</sup>

新たな騎士団の設立における役割としては、神に選ばれた勇敢な戦士たちを召集することが王に課されている。この戦士たちの召集は、キリスト教世界のすべての王たちと諸侯たちによって、それぞれの王国および領地においてなされるべきことであるとメジエールは述べるが、とりわけフランスとイングランドの強き王たちが、実際に騎士団を設立しようと熱心に働くべきであるとする。<sup>(49)</sup>そして実際に遠征を行う際には、フランスやイングランドにおいて召集された騎士たちが、この騎士団の主要な部分を構成するとされる。<sup>(50)</sup>またメジエールは、王や諸侯たちが自らこの騎士団を、信仰の敵に対して率いることを推奨する。そしてこの騎士団は、彼らの命令に彼ら自身の騎士たちよりも良く従うことだろうと述べている。

以上のようにフランス王は、キリスト教世界における第一人者と位置づけられ、異教徒との

---

(46) Contamine, Ph., '« Les princes, barons et chevaliers qui a la chevalerie au service de Dieu se sont ja vouez ». Recherches prosopographiques sur l'ordre de la Passion de Jésus-Christ (1385-1395), dans *La noblesse et la croisade à la fin du Moyen Âge*, pp. 43-67; Bell, A., 'English Members of the Order of the Passion: Their Political, Diplomatic and Military Significance,' in *Philippe de Mézières and His Age*, pp. 321-346.

(47) *Épistre lamentable*, pp. 122-124.

(48) *Épistre lamentable*, pp. 124-125.

(49) *Épistre lamentable*, pp. 184-185.

(50) *Épistre lamentable*, pp. 188-189.

戦いと新たな騎士団の設立において主要な役割を果たすべきとされている。しかしながら、同じくメジエールによって執筆された『老いたる巡礼者の夢』における議論と比較すると、シャルル6世個人の資質についての議論が『嘆きと慰めの書簡』では失われている。前者においてシャルル6世は「若きモーゼ」などと呼ばれて、シスマの解決と聖地奪還の戦いにおいて主導的な役割を積極的に果たすことを期待されている。それに対してこの『書簡』では、新たな騎士団の設立に関わる部分を除けば、14世紀初め以来フランス王の権威について作り上げられてきた、一般的な議論をまとめたものになっている。

こうした変化の一番の理由は、シャルル6世が狂気の発作により、安定して政権を担うことが難しくなったことだろう。『老いたる巡礼者の夢』のプロローグで僅かに示唆されるのみであった騎士団の構想<sup>(51)</sup>が、『書簡』において最も重要な議論となっているのも同じ理由からだと思われる。しかしその一方で、フランス王の現状がどのようなようであっても、王をキリスト教世界の第一人者とする議論は揺るいでいないとも言うことができる。このフランス王の健康の問題は、次節において見るように、当時のフランス王権の政策を支える白ユリ諸侯についての議論にも影響を与えている。

### (3) ブルゴーニュ侯の役割

当時のフランス王権において、イングランドとの和解を主導したのはブルゴーニュ侯フィリップであった。この行動の背景には、毛織物の生産を通じてイングランドとの関係が深かったフランドル諸都市の動向を安定させ、自領の支配を確固たるものとし財政的基盤を補強することを望む、侯の意図が存在していた。そして、ニコポリス十字軍への参加にも同様の意図が隠されていた。J・マギーの考察によれば、ブルゴーニュ人による十字軍を実現することで、フィリップはブルゴーニュとフランドルに存在する自身の領域の威信を高めようとしたのである。派遣する軍隊の指揮官に息子のヌヴェル伯ジャンを据えたのも、後継者の名声を確固としたものにするためであった。オルレアン侯ルイが参加を取りやめたのは、フィリップのこうした意向に反発したためであったとマギーは述べている<sup>(52)</sup>。

こうしたブルゴーニュ侯の主導による十字軍への参加に対し、メジエールは反対であったと思われる。というのも、先に考察したように彼の考えでは、異教徒に対する戦いはカトリック世界全体が一致団結して実施するべきものであり、その中心に存在するのはフランス王でなければならなかったからである。

彼はまた、ニコポリスで捕虜となった者たちを、身代金を支払うことで解放しようとする動きにも批判的である。バヤズイトによる身代金の要求を、使者のジャック・ド・エイイを介して知らされたブルゴーニュ侯は、ただちに東方へと使者を送り、捕虜となった息子ヌヴェル伯たちの解放に向けた交渉を開始する。メジエールは交渉が成功する可能性を否定しないが、自

(51) *Le Songe du Vieil Pelerin*, vol. 1, p. 88において、イエス・キリストの受難騎士団の規則についての言及があるが、詳しい内容については触れられていない。

(52) Magee, op. cit., pp. 50-53.

身の東方での経験を通じて得たトルコ人についての知識をもとに疑念を提示している。トルコ人とその君主たちは、本質的に野蛮で残忍な、あまり教育をされていない人々であり、自身に有益でないならば、しばしばキリスト教徒との取り決めに忠実に果たさないことがある。バヤズィトが交渉を望んだとしても、フランス王国が負担できないほどの莫大な金額を要求するかもしれない。また、身代金を支払ったとしても、それをキリスト教諸国に対する攻撃に使用する可能性がある<sup>(53)</sup>。このように述べて、彼が提案する騎士団による戦いを通じて捕虜の解放を実現すべきだと論じている。

それではメジエールの構想において、ブルゴーニュ侯フィリップはどのような役割を与えられているのだろうか。

もし我らの主君である王〔フランス王〕とその他のキリスト教の王侯たちが、あなた〔ブルゴーニュ侯〕によってあなたと共にこの薬が提示されて、もし彼らがこの薬を賢明にも使用することを望み、そうすることができたならば、キリスト教世界の軍隊の最高指揮官たる神〔イエス・キリスト〕の好意としかるべき温情により、彼らの致命的な痛手は癒され、恐ろしく傷ついた信仰の栄光と、信仰の敵であるトルコ人たちの剣により傷つけられ損なわれた王たちの威厳は、よみがえって神において讃えられ高められるだろう<sup>(54)</sup>。

このようにメジエールは、彼の提案する救済策がブルゴーニュ侯によってキリスト教世界のすべての王や諸侯に伝えられ、侯の促しによって実現することを期待している。

さらに騎士団の設立に関して彼は次のように述べる。

この騎士団は、(中略)とても強く高貴なブルゴーニュ侯フィリップの高い武勇と賢明な経験と知恵により、キリスト教世界のすべての王侯、特にいともキリスト教的なフランス王と、そのいとも愛すべき息子にして兄弟であり従兄弟である高貴なるイングランド王と、彼らの諸侯によって、(中略)神に従い1つの神秘体として設立され召集されるだろう。(中略)この任務は、神の名において、そしてキリスト教世界の王たちと誠実なる人たちの名において、あなた〔フィリップ〕に割り当てられるべきである<sup>(55)</sup>。

ブルゴーニュ侯には、キリスト教世界のすべての王たちの名において、騎士団を召集する任務が与えられている。そしてこの騎士団の設立に反対する者に対しては、聖書におけるファラオに対するモーゼのように、杖によって神の意志を示すよう促される<sup>(56)</sup>。つまりブルゴーニュ侯は、フランス王に代わって騎士団の創設における実務を担当することを期待されている。

---

(53) *Épître lamentable*, pp. 171-174.

(54) *Épître lamentable*, p. 134.

(55) *Épître lamentable*, pp. 184-185.

(56) *Épître lamentable*, p. 204.

この期待はブルゴーニュ侯フィリップ個人の武勇・経験・知識に対するものであるが、同時にフランス王家の一員としての義務を促すものでもある。この『書簡』では、「フランス王とその家系」や「フランス王とその高貴なる血族」といった表現があちらこちらで見られ、なかでもブルゴーニュ侯はその代表のように名を挙げられている。また侯に対して聖王ルイの血を引くことを思い出すよう述べている箇所もあり、王と白ユリ諸侯の一体感を強調するものになっている。こうした表現は『老いたる巡礼者の夢』では見られなかったものであり、王の発病後にフランス王権の政策を担っていた白ユリ諸侯に、自分の利益のためではなく王のために動くことを促すものと考えられる。

このようにメジエールはブルゴーニュ侯に対して、フランス王を補佐する役割を促している。ただし、彼の提案する構想に対し何か異議があればブルゴーニュ侯が訂正するように述べており、第2章で指摘した侯との微妙な関係にも配慮した提案となっている。<sup>(57)</sup>

## おわりに

ニコポリス十字軍の敗因としてフィリップ・ド・メジエールは、離教者、つまり正教徒たちとの混成軍だったことと、彼らの影響により軍隊の秩序規律が乱れたことを挙げる。そこで、カトリック・キリスト教世界全体が一致団結して、軍隊において必要な徳を備えた新たな騎士団、「イエス・キリストの受難騎士団」を設立することを提案する。

この構想においてフランス王は、キリスト教世界における信仰の最高の守護者と位置づけられ、騎士団の設立と異教徒との戦いにおける中心となることを求められる。ただしそこで展開される内容は、フランス王の権威についてこれまでに作り上げられてきた議論をまとめたものであり、王個人の資質に頼ることのない普遍的な議論となっている。フランス王シャルル6世の健康上の問題は扱われず、王個人の状態がどんなものであれ、フランス王の権威自体に影響を与えるものではないというメジエールの考えをうかがうことができる。

かわりに重要な意味を持つてくるのが、フランス王家の血統に連なる諸侯の役割についての議論である。白ユリ諸侯を代表する者の1人としてブルゴーニュ侯は、王を補佐して新たな騎士団の設立における実務を担うことを期待されている。シャルル6世が狂気の発作により継続的に政権を担うことができないという状況において、メジエールは白ユリ諸侯たちに対して、自身の利益を優先させるのではなく王のために行動することを促し、フランス王権としての一体化を求めた。

フランス王家の血族ではないが、イングランド王リチャード2世も白ユリ諸侯と同様の立場にあるとして考えることができる。第4章の引用において見られるように、リチャードはシャルル6世の息子・兄弟・従兄弟として、騎士団の設立と遠征におけるフランス王の重要な協力

(57) *Épistre lamentable*, pp. 99, 124, 133, 168, 227, etc. とくに 133 頁と 227 頁では、ブルゴーニュ侯とともにベリー侯の名も同時に挙げられている。

(58) *Épistre lamentable*, p. 218.

者に位置づけられている。イザベルとの婚姻が実現したことにより、リチャードは有力な王としてだけでなく、フランス王の親族として協力することを望まれている。

以上のように、フランス王自身が病気でキリスト教世界の指導者としての権威は揺らぐことがない。フランス王の近しい親族たちが、王権内およびキリスト教世界において王を支えることでその他の君主諸侯に模範を示し、すべてのカトリック教徒が一体となることをメジエールは期待している。そして、生涯を通じての夢である聖地回復の実現を目指したのである。

しかしながらメジエールの議論は、シャルル6世とリチャード2世の実際の友好的な関係に基づいている部分も多く、その関係の消滅は彼の構想を揺るがすものだった。1399年9月末にリチャードは議会によって廃位され、ランカスター家のヘンリ4世が即位する。ブルゴーニュ侯フィリップはヘンリに接近し、オルレアン侯ルイとの対立を次第に深めていくことになる。メジエールの聖地奪還のための構想は、ついに実現することはなかった。

本稿における考察は、フィリップ・ド・メジエールのフランス王権についての考えを明らかにするものであり、当時のフランス王権の周辺においてなされていた議論の1つに過ぎない。しかし、今回の分析で示したフランス王権論において、以前のように王個人の資質を強調する必要がなくなっている点は注目に値する。どのような王が即位しても、フランス王の権威自体に影響を与えることがないほど、フランス王をキリスト教世界の指導者に位置付ける議論は、この時期には王権内に浸透していたと言える。また彼の議論は白ユリ諸侯の存在も内包したものになっており、当時のフランス王権における政権のあり方について考える上でも興味深い。王の発病によって、白ユリ諸侯の意向が王権の政策決定において重要性を増すなか、一体となって王を補佐することを彼らに促すことで、王の権威をより強固なものにしようとする姿をここには見出すことができる。以上の点について議論をより深めるためには、メジエール以外の当時の著述家たちの主張を検討する必要があるが、それについては今後の課題としておきたい。